

ギリシャ新政権の100日

—ユーロ圏債務処理のエンドゲーム—

中 川 辰 洋

要 旨

本稿のテーマは、2015年1月25日のギリシャ総選挙で、アントニス・サマラスの与党・新民主主義党を制して政権の座に就いたアレクシス・ツィプラス率いるシュリザ（急進左派連合）の債務再交渉要求をめぐってくり広げられたEU／ユーロ圏の協議の経緯と帰結を、その背景にある諸事情とともに分析し、あわせてギリシャひいてはユーロ圏の債務処理の行方を展望するところにある。急進左派政権の“反緊縮・反トロイカ”政治闘争は、政権発足から約100日後の4月28日、EUなどの債権団の意向を映した財政規律の確立と経済構造の改革を約して終結する。ツィプラス政権の100日闘争は債務処理の「エンドゲーム」といえるが、“ゲームオーバー”がただちにゴール間近というわけではない。社会保障費を中心とする財政支出の削減、労働市場の改革、ERT（国営放送）をはじめ国営企業の民営化などに反対する勢力が与野党を問わずすくなくないからである。ツィプラス政権が6月末に予定されている改革プログラムを策定し、ユーロ圏諸国や債権団の最終的承認を得るまでになお紆余曲折が予想される。

目 次

- | | |
|--|----------------------------------|
| はじめに | られる左翼原理主義 |
| I. 第1段階（1月25日～2月24日）—— “不自然な連合”の誕生と債務再交渉 | III. 第3段階（3月28日～4月28日）—— ゲームオーバー |
| II. 第2段階（2月25日～3月27日）—— 追い詰め | 結びにかえて |

“Although I laugh and I act like a crown
Beneath this mask I am wearing a frown
My tears are falling like rain from the sky
Is it for her or myself that I cry (...)”

—— The Beatles, “I’m A Loser”

はじめに

2015年1月25日に実施されたギリシャ総選挙で、アレクシス・ツィプラス率いる最大野党で反緊縮政策を掲げた急進左派連合（Syriza）が、アントニス・サマラスの与党・新民主主義党（Nea Dhimokratia: NΔまたはND）を制して第一党へと大躍進をとげた。

今次総選挙は、サマラスの擁立する大統領候補スタボロス・ディマス元ヨーロッパ委員（環境問題担当）が議会で否決された結果、サマラスが自らの信を問うべく実施されたものであった。だが、緊縮政策がギリシャ国民に不人気であることを考えるなら、首相の議会解散・総選挙の賭けの成果は目に見えていた。やがて明らかにするように、ギリシャの経済不振は底を打ったとはいえ、依然として低い成長率と高い失業率（25歳以下の若年層は50%超）のもと、250万人に及ぶ貧困層や生活困窮者の支持を得てシュリザは急伸、与党NDの劣勢は覆いがたかった。大票田のアテネ市の集計結果が発表される前に、ツィプラスは早々にシュリザの支持者に向かって勝利宣言を發し、IMF（国際通貨基金）などの国際債権団——いわゆる“トロイカ（Troika）”——の課した緊縮政策への隷属という「ギリシャ国民にとっての屈辱と苦難の日々は終わった」とブチ上げ、トロイカやユーロ圏の指導者たちとの間でギリシャの債務処理の再交渉に取り組むことを宣言した。

いうまでもなく、これはツィプラスがギリシャ憲政史上初の急進左派政権の首班に就任することを見越してのステイトメントであった。しかし正式選挙結果では、下馬評どおりシュリザは単独過半数に2議席届かない149議席にと

どまった。ツィプラスは少数与党として政権を担当する道を選択せず、ただちに連立政権を目指して他党と政策交渉を開始した。この結果、ツィプラスはTVジャーナリストから政治家に転身したスタヴォロス・セオドラキス率いる中道政党との連立という選挙前の方の予想を覆して、パノス・カメノスを党首に戴く右翼政党のANEL（独立ギリシャ人）を連立パートナーとして選択した。ヨーロッパ・メディアの的確な表現を借りれば、神聖あたわざる「不自然な連合（an unholy alliance）」の誕生である。仮にそうであるとしても、急進左派主導の政権の誕生は、この間ギリシャ政治を壟断してきたミツォタキス、カラマンリス、パパンドレウの3つの王朝による「泥棒国家（kleptocracy）」体制に風穴を開ける現代史の一大事件であり、ギリシャとそのパートナーであるEU加盟諸国には歓迎されてしかるべきであった。しかも政治の世界では、シュリザの選挙戦での勝利とツィプラス率いるシュリザ-ANEL連立政権といわず、新たに誕生した政権はこれを、たとえ醒めた目であろうと100日間は「お手並み拝見」とばかりに静観するのをならいとしてきた。

ところが、EUやユーロ圏のパートナーにとって、アテネの新政権は“神聖あたわざる”どころか歓迎すべからざる客人に等しく、その発足から100日になんなんとする2015年4月末、ツィプラスはついに進退去就を迫られるところまで追いやられた。その最大のポイントは急進左派政権の主張する政策転換——ギリシャ語の“kolotoumba”，すなわちサマラス前政権が実施してきた緊縮政策からの転換、ギリシャ債務救済プログラムの再交渉とその見返りとしての新経済改革プログラムの策定にあった。アテネ

の新政権が2月に発表したプログラムは、サマラス前政権が公約した国営企業の民営化などを事実上棚上げし、大手企業やオリガルキー（新興財閥）などへの脱税取締りの強化、船舶税の見直し、奢侈品に対する税率引上げ、さらに高齢生活困窮者などへの年金受給資格の拡大、最低賃金の引上げといった「左派」色の濃い施策を提示し、かつ財政相ヤニス・ヴァルファキスをして債務交渉の任に就かしたのである。

これに対して、EU／ユーロ圏の首脳は即座にアテネ新政権の要求を拒否した。なかでもドイツのヴォルフガング・ショイブレ財政相は「ギリシャ国民の選択を尊重するにやぶさかではないが、新政府といえども先の政府がわれわれと合意したルールに従う義務がある」とのべ、シュリザ-ANELの債務再交渉要求に一歩たりとも譲らない構えをみせた。また、ユーログループ議長イェルン・ダイセルブルームも、ショイブレと同様の見解に立ち、経済改革の継続を強くもとめた。だが極めつけは、ヴァレリー・ジスカール＝デスタン前仏大統領やスヴェニアのロベルト・フィコ首相らによる「ユーロ圏からの自発的離脱」勧告であった。建前はともかく本音ではジスカールやフィコに同調する向きがすくなくないといわれるが、メディア筋のいうように、最悪のシナリオとしてのギリシャのデフォルト、ユーロ圏離脱（Greek exit from the euro: Grexit）——とりわけメディア筋のいわゆる「偶発的かつ予期しないユーロ圏からの離脱（Greek accidental exit from the euro: Graccident）」——の可能性を想定しているのはひとりドイツだけではないことを図らずも示す結果となった。

後述するように、アテネの新政権はユーロ圏

諸国の厳しい姿勢に表向き「譲歩」して2月末に支払期限の到来する債務救済プログラム（総額2,400億ユーロ）の返済の4カ月間延期する合意を取り付け、その見返りとして緊縮政策の継続、経済改革の断行のリストを作成することを約した。ところが、咽喉もと過ぎればなんとやらのたとえよろしく、ツィプラス政権は2012年の救済プログラムの未使用分70億ユーロ相当の即時振込みを要求し、これを頑として拒絶するパートナーとの間に激しい対立を招くことになった。このため、アテネの新政権は3月以降のIMF（国際通貨基金）、ECB（ヨーロッパ中央銀行）、ヨーロッパ委員会の三者——トロイカをはじめとする債権者への債務返済に窮することが避けられない情勢となった。交渉決裂を不服とするギリシャ政権は、金融支援が実施されなければ「歴史的にも文化的にも強い絆で結ばれた」ロシア、あるいは中国やアメリカなどに資金提供を要請するなどの「別の道」を模索するといひ、さらに相前後してヴァルファキス財政相をして救済を拒む最大の債権国ドイツに対して第2次世界大戦中のナチス＝ドイツによるギリシャ支配の賠償を要求するといわしめたのである。

ドイツ・サイドがこれを看過するはずはなく、ただちに政治家たちがアテネの政府に抗議しただけでなく、『アルゲマイネ・ツァイトゥンク (*Allgemeine Zeitung*)』や『デア・シュピーゲル (*Der Spiegel*)』など有力メディアも政治的立場の相違を越えて一斉にギリシャ批判の論陣を張るなど、両国の外交関係は悪化する一方であった。EUの債務救済プログラムの延長の見返りに提出を約した経済改革プログラムの提出を目前にした4月17日、ドイツのショイブレ財政相はこれ見よがしに「〔金がほしいな

ら] モスクワにでも、北京にでも、ニューヨークにでも行くがいい」と言い放った。いってみれば、シュリザへの最後通牒である。ことほどさように、4月20日にラトビアの首都リガで開催されたユーログループ会合において、ギリシャのパートナーはツイプラス政権の救済要求を突っ撥ねた。ここに至ってギリシャも勝算なしと悟り不承ながらも同意せざるを得ず、3時間に及ぶ協議の末にユーログループの前に膝を屈した。ダイセルブルーム議長は会合後の新聞発表の席でこう語ったという。「[ギリシャが仕掛けた] チキンゲームはいまや“アングリーバード (Angry Birds)” に転化したようだ」 (“アングリーバード” とは、フィンランドが発した欧米で人気のモバゲーで、鳥たちがかれらの卵を盗む強欲なブタの陰謀を暴き仕返し(殲滅)するストーリーである)。

ギリシャ政府は一週間後の4月27日、財政相ヴァルファキスに代わって、首相に近いエウクリデス・ツァクトロス^{ツァクトロス}を長とする新たな債務交渉団のメンバーを発表、“トロイカ” あらため「関係諸機関 (Institutions)」との協議に当たらせるとした。そして新交渉団は翌28日のユーログループの事務レベル会合においてギリシャのパートナーの意向に即した交渉を再開し経済改革プログラムをあらためて策定する用意のあることを明らかにした。ここにサマラス政権とは正反対の反緊縮、債務減免といった公約を掲げて政権の座に就いたツイプラスは、自らを“チキン (弱者)” に見立ててパートナーに仕掛けたゲームに敗北したとあってよい。時あたかも急進左派主導の政権が発足して100日になろうとする時分のことである。

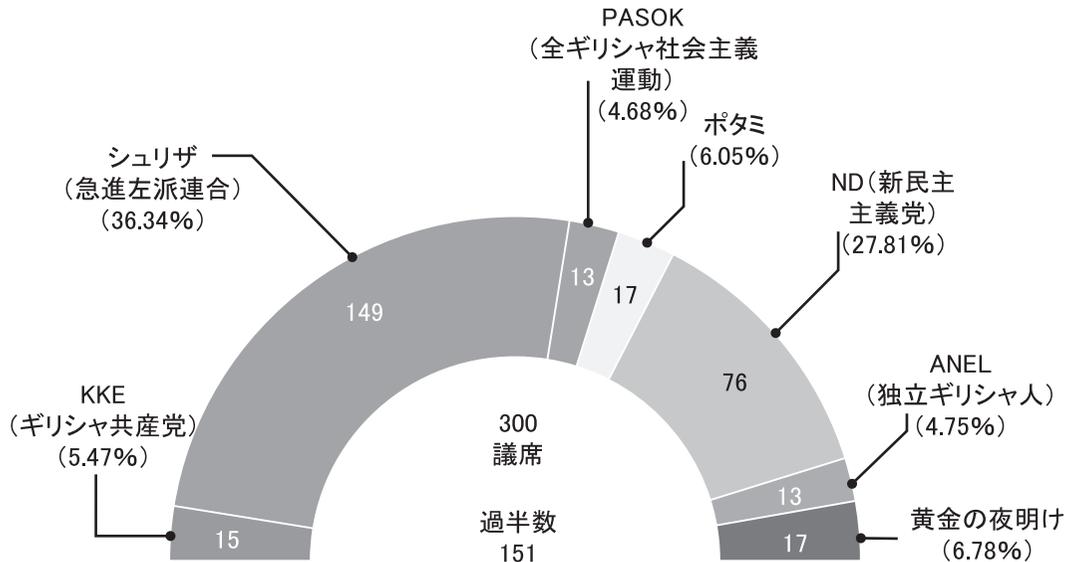
もっとも、“労働者階級の^{プロレタリアート}前衛” であるばかりか、計算高い政治家であるツイプラス首相の

こと、打ち破ることのできない壁を前に矛を収めたとみるのは早計である。仮にツイプラスがダイセルブルーム議長の暗示する“アングリーバード” ——すなわちギリシャをのぞくユーロ圏諸国への負けを認めたとしても、党内の左翼原理主義者や支持母体の労働組合などが、パートナーの要求する年金制度や労働市場の改革、国営企業の民営化などの施策をすんなり認めるとは考えがたい。なお紆余曲折があるとみるのが当然である。

そのツイプラス首相にとっての最大の強みは、5月以降の債務返済がもしも延滞するか不可能となったとしても、これを債務不履行と判断するのがユーロ圏諸国やIMFなどの債権団であるということにある。しかも、ECBに債務を返済できなければ、ギリシャの銀行が保有する国債もデフォルトと看做されるが、そのさいECBはギリシャ系銀行向けに流動性供給の義務を負うことになる。さらに、より重要な点であるが、現行のEU基本条約(リスボン条約)の条文にはユーロ圏離脱の規定は存在せず、ギリシャのデフォルトがユーロ圏離脱に直結しないことであり、ECBのヴィルト・マヌエル・コンスタンシオ副総裁もそうした見解を支持している。その意味からすれば、ギリシャに端を発する今次ユーロ圏ソブリン危機は終焉を迎えつつあるとはいえ、レースでいえば、ホームストレッチに差し掛かったところであって、ゴールはなお先にある。6月末までユーロ圏は総体として依然波乱含みといっても決して誇張ではない。

本稿の課題は、急進左派連合のアレクシス・ツイプラス率いるアテネ新政権の100日をふり返り、この間のヨーロッパ政策、とくに債務返済問題をめぐる政治的コミットメントを、その

図表1 ギリシャ国政選挙開票結果 (2015年)



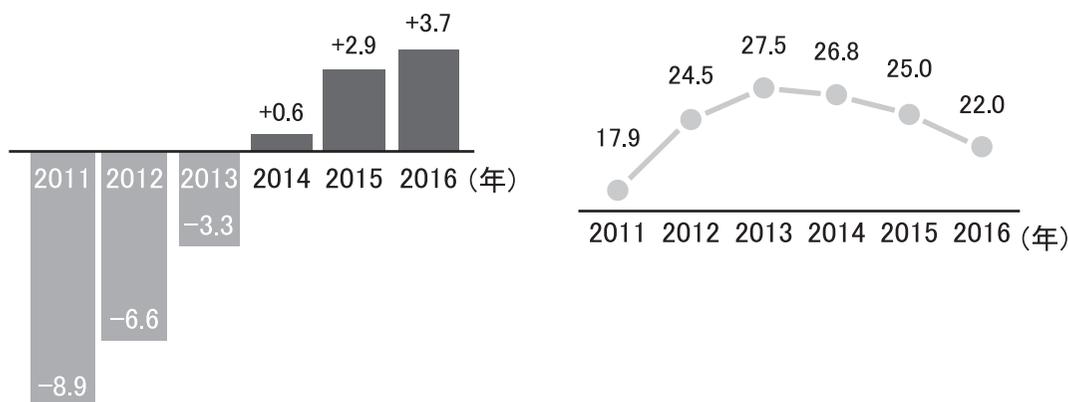
(注) 政党名下のカッコ内の数値は得票率を示す。
 [出所] Les Echos 資料より引用。

背景にある政治的・経済的諸事情とともに整理・分析するところにある。以下では新政権の100日をつぎの3つの段階に分けて考察する——。すなわち、①ツイプラス政権発足から2月下旬のギリシャ金融支援プログラムの期限の到来とその延長の取決めが交わされるまでの段階、②3月のユーログループ会合を頂点とする3月末までの1カ月間、そして③急進左派政権が翻意し4月末にユーログループの要求を事実上受け容れ、債務交渉に臨む決定を行うまでの3つの段階である。これら一連の交渉はまた、ギリシャのほかイタリアやスペインなどのソブリン危機の処理・解決のありようにもはね返る可能性も否定できない。文字どおり“エンドゲーム”と呼ぶにふさわしい段階に差し掛かっていることを示すものであるが、これをさらにつき詰めればEUやユーロ圏が今後どのような方向を向きつつあるかを問うことでもある。

I. 第1段階 (1月25日～2月24日) —— “不自然な連合の誕生と債務再交渉”

アントニス・サマラス内閣の総辞職・議会解散を受けて2015年1月25日に実施された総選挙の結果、アレクシス・ツイプラスを党首とする急進左派連合がサマラスの与党・新民主主義党 (ND) を抑えて第一党に大躍進した。だが、シュリザが獲得した議席は単独過半数にわずか2議席足りない149にとどまった (図表1)。このためツイプラスは少数与党か連立かの選択を迫られたが、結局、パノス・カメノス率いる右翼政党の ANEL (独立ギリシャ人) との連立政権を発足させた。ヨーロッパ・メディアのいう「神聖あたわざる不自然な連合」である。たしかに選挙前の予想では、スタヴォロス・セオ

図表2 ギリシャの経済成長率および失業率の推移（2011年から2015年、単位：％）



(注) 2015、16年は予想。

〔出所〕 European Commission 資料は引用。

ドラキスの中道政党“ポタミ (To Potami: La Rivière)”との連立の予想もなかったが、シュリザが政権公約として掲げた反緊縮に理解を示すわずか13議席の泡沫政党 ANEL のほうが、緊縮政策の継続や経済改革の断行もやむなしとする中道派よりも与しやすいとの政治的判断が働いた結果であった。

これをツイプラスの「方向転換」と見るメディアもあるが、仮にそうであれば財政相にヤニス・ヴァルファキスを起用したこともツイプラスの「方向転換」といえるかもしれない。新財政相は“ゲーム理論”を講義する大学教員出身で、自称“自由主義マルキスト”と筋金入りの左派とはいえ、PASOK（全ギリシャ社会主義運動）のゲオルギス・アンドレアス・パバンドレウの経済顧問を務めた人物でもある。さらに、3月には宿敵・新民主主義党出身のプロコピス・パヴロプロスの大統領選出に同意したばかりか、首相就任時にギリシャ正教大主教イェロニモス2世とのツーショットを披露してメディア筋を驚かせたことは、日ごろ左派的信条や無神論を公言してはばからない新政権の首班

の「方向転換」あるいは「変節」と見られた。

だがこれらは、所詮、シュリザ-ANEL の「不自然な連合」と同様、計算高い政治家ツイプラスの国民向けのポーズにすぎず、「方向転換」でも「変節」でもないと考えるほうが適切であろう。事実、政権発足直後に発表された経済プログラムはシュリザの選挙公約を「具体化」したものであった。その第1は、図表2に示されるとおり、ギリシャ経済の不振は底を打ったとはいえ、依然として低い成長率と高い失業率（25歳以下の若年層は50%超）のもと、250万人に及ぶ貧困層や生活困窮者を生み出すなど、国民の生活を脅かす人的危機への対策として、貧困線以下の家計30万を対象とする大規模な財政支出の実施である。具体的には光熱費など公共料金の負担軽減、食料品の補助、交通費の減額、最低賃金の引上げ（月額580ユーロ→751ユーロ）などである。

第2は経済の再活性化であり、固定資産税の廃止、非課税世帯の所得限度額の引上げ（5,000ユーロ→12,000ユーロ）のほか、家計や中小企業を対象とする公的投資機関の新設など

である。そして第3には雇用創設であり、官民あわせて30万人の雇用を創設するとともに、雇用契約の弾力的な運営を目指すなどとした。シュリザ・スポークスマンによると、これらの施策を実施するためには約135億ユーロの資金が必要となるが、その資金は付加価値税の引上げや脱税の取締り強化のほか、EUの構造基金の導入やギリシャ国債を保有するEUやユーロ圏のパートナーによる債務の一部を放棄することを要求している。

急進左派の提示したプログラムを実施するには、シュリザとヨーロッパのパートナーとの間でつぎのような合意が成立することを前提にしている。ひとつは、2015年中の利払いの猶予と債務の30%から50%の減免である。いまひとつは、新たな融資条件の決定に関するものである。おりからギリシャ向け債務救済プログラムの期限が間近に控えていたから、新政権にとって同プログラムの延長要求は政権の死活にかかわる重要性をおびていた。

EU諸国やIMF、ECBなどとの債務交渉チームの責任者の任を拝命した財政相ヴァルファキスが臨んだ2月11日の第1回目のユーログループ会合は、ドイツばかりかバルト3国や東欧のパートナーの厳しい姿勢の前に物別れに終わった。なかでも、この1月に19番目のユーロ導入国となったバルト海沿岸の小国リトアニアの財政相リマンタス・シャジュスは怒りを露わに最低賃金の引上げ案に噛みつき、「ギリシャ国民は〔国が借金まみれにもかかわらず〕わが国の国民よりも高い最低賃金を受け取っている。ギリシャの国民よりも貧しいわれわれリトアニア国民が支えなければならないというのは筋が通らない」とギリシャの同僚を難詰した。

ところが、ギリシャ政府はこれをものともせず、新政権の首班として正式の国際デビューとなった2月12日のEU首脳の緊急会合の席上、ツイプラスは前日の財政相と同様にギリシャの深刻な経済難を訴え、同月末に返済期日が到来する総額2,400億ユーロの支援の返済の4カ月間の猶予（延長）要求に理解をもとめた。しかも、前日のユーログループ会合でツイプラスの財政相が再三言い放ったいわゆる“トロイカ”——IMF（国際通貨基金）、ECB（ヨーロッパ中央銀行）、ヨーロッパ委員会——との交渉を行わない旨の主張をここでもくり返した。

もとより、アテネ政権の要求はギリシャの最大の債権国ドイツなどの加盟国の受け容れるところとならなかった。ばかりか、ECBのマリオ・ドラギ総裁、さらにはドイツ流の緊縮政策に距離を置きツイプラス首相に一定の理解を示したフランス出身のヨーロッパ委員（経済・金融サービス担当）ピエール・モスコヴィシをして「新政権はよりいっそうの経済改革に邁進すべき」といわしめた。前政権の「最大限の緊縮と最小限の経済改革」から転換し、経済改革を最大限推進しなければギリシャ経済の復興はありえないとするヨーロッパのコンセンサスを代弁したといつてよい。年金受給者の範囲拡大、最低賃金の引上げなどは、とどの詰まり、シュリザの支持層である組織労働者や年金生活者への「優遇策」であり、自らを支持する見返りにこれを優遇し改革を遅らせた中道右派のサマラスや中道左派を自称するパンドレウらの「縁故主義」と変わるところがない。唯一異なるのは、ユーロ圏からの離脱（Grexit）の可能性を灰めかしたことぐらいのものである。

このように、ツイプラスやヴァルファキスはEUやユーログループの緊急会合の場でユーロ

圏離脱をちらつかせつつかれらのパートナーから譲歩を引き出そうとしたが功を奏することはなかった。2月16日の第2回ユーログループ会合でシヨイブレ独財政相はヴァルファキス財政相に対して「われわれの支援をのぞむなら、この間の取決めを尊重すること、それがすべて」とギリシャの要求を一蹴した。ドイツの財政相にしてみれば、ギリシャの政権交代を緊縮政策からの転換の足がかりとすることを目論んでいたヨーロッパ委員会のジャン＝クロード・ユンケル委員長、フランスのフランソワ・オランド大統領やイタリアのマテオ・レンツィ首相らが最終的にドイツ支持に回ったことに加えて、各国の官庁や金融機関の調査の結果、ユーロ圏離脱は「ギリシャ国内に壊滅的事態を引き起こす」にしても、ドイツおよびユーロ圏にとっては「管理可能」との読みがあった。加えて、前年11月に稼働したヨーロッパ銀行同盟やEUの救済基金がギリシャで起こり得るカタストロフの影響を隔離する“ファイアーウォール”としての効果を発揮するとの見方もあった。

もっともメディア筋によると、ツイプラス首相はブリュッセルで開かれた16日の会合の経緯を報告し形勢不利と見て取り最終判断をもとめたヴァルファキス財政相に対して、「ドイツの要求を断じて呑まない。妥協はあり得ない。徹底抗戦あるのみ」と伝えたといわれる。アテネの首相府が勝算なしと判断するまでにいますこし時間が必要のようであった。ことほどさように、第3回ユーログループ会合が開催される2月20日午前、独仏首脳が「経済改革なくして金融支援なし」をあらためて確認したと伝えられるが、フランスのミシェル・サパン財政相がいったとされる「ヨーロッパはフランス、イタリア、スペインの3国とドイツのふたつの極か

らなるという類のヨーロッパ観は幻想でしかない」を、さしものツイプラス首相も当座は認めざるを得なくなったといえるかもしれない。

同日午後ブリュッセルに集ったユーロ圏19カ国の財政相は、ギリシャの同僚がサマラス前政権の合意した経済改革プランを前提に「よりスピーディかつ実効性のある」改革リストを策定し、改革の進捗状況をユーログループのパートナーや「関係諸機関」——ギリシャに配慮して“トロイカ”に代わる外交辞令——に報告することを約した。これを受けて2月24日、ユーログループは電話による会合でギリシャ政府に対して4月末までに改革案を提出することを条件に4カ月間の救済プログラムの猶予を認めることで合意に達した。この結果、ギリシャはEUやユーロ圏のパートナーによるかつてない厳しい監視下に置かれることになったのである。

Ⅱ. 第2段階（2月25日～3月27日）——追い詰められる左翼原理主義

アレクシス・ツイプラス首相は2月25日、「2月20日のユーログループ合意はわれわれの勝利」と与党シュリザや連立パートナーのANEL（独立ギリシャ人）の同志に向かって訴えたが、党内の極左グループやANELの強硬派がこれを不服としたのは当然であった。すなわち、首相のいう「勝利」はユーログループの声明のなかでIMF、ECB、ブリュッセルの委員会の債権団の呼称を“トロイカ”ではなく、「関係諸機関」に改名したぐらいのものであり、ギリシャの経済状況の改善にはすこしも寄与しない——それどころか、われわれの目指す政策を策定し実施する自由は完全に奪われたとはげ

しく非難し、いうところの「関係諸機関」を相手に債務交渉を再開するよう訴えた。

一方、EUやユーロ圏諸国のなかにも、20日の合意に懐疑的な見方がすくなくなかった。例えば、ヨーロッパ委員会のピエール・モスコヴィシ委員はこういつている。「問題は、アテネの政府がギリシャの経済改革プログラムを作成できるかどうかにある」。実際、国営企業の民営化ひとつをとっても、ドイツのアンゲラ・メルケル首相の指摘するように、「国が51%の株式を保有する民営化計画など見せかけで、だれも興味を示さない」ことはたしかであった。また、最低賃金の引上げ、サマラス政権下で解雇された公務員3,000人の再雇用、年金受給者の範囲拡大などの左派的政策はギリシャのパートナーの認めるところではなかった。ヤニス・ヴァルファキス財政相お得意の歯に衣を着せぬいいようを借りれば、「プログラムは〔それがどのような内容であろうと〕、所詮、プログラムでしかない」のである。

これに対して、メルケルの財政相ヴォルフガング・ショイブレが「アテネの新政権の政策は、われわれが築き上げたギリシャとの信頼関係をブチ壊すに等しい」といつてため息をつくのも当然であったろう。ツイプラス首相が選挙直前の1月21日付『フィナンシャル・タイムズ (Financial Times)』紙に寄稿した小文のなかで「民主的手続きを踏まえてバランスのとれた政策運営を行う」との謂は「選挙目当てのパフォーマンス」でしかなかったといわんばかりである。また、かくいう独首相が最大級の敬意を払ってやまないIMFのクリスティーヌ・ラガルド専務理事も、相前後して「〔ギリシャ政府は〕財政規律の確立と経済改革によって債務危機を克服しつつあるアイルランドを見習うべ

きである」と、ツイプラス首相に注文をつけている。

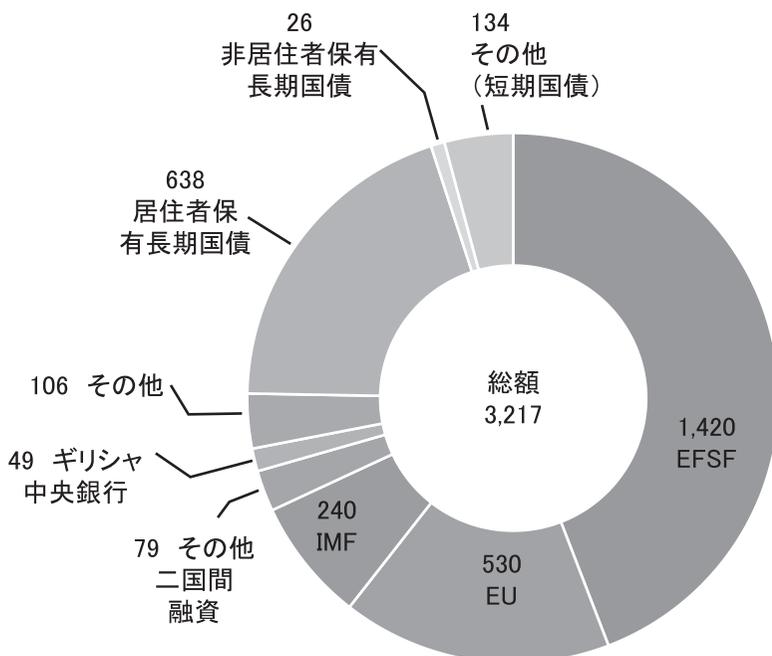
シュリザの経済政策への批判的な意見は国外だけではなく国内でも決してすくなくなかった。元PASOK (全ギリシャ社会主義運動) 系議員で、現在は改革派エコノミストとして著名なエレナ・パナリティスはその代表格であり、「ギリシャは6月末までの4か月間はきわめて危険な状態にある。一連の経済改革案を早急に作成しなくてはならない」と、フランスの左派系メディア『リベラシオン (Libération)』に答えている。しかし、何にもましてツイプラス首相にとって“誤算”であったのは、恃みとしたブリュッセルの委員会のピエール・モスコヴィシ委員 (経済・金融市場担当) までもが、ギリシャ・サイドに与せず、「経済改革プログラムが提示されなければ、ギリシャは救済資金を手にすることはできない」といつて、ユーログループ合意に即した経済改革をすみやかに策定・実施するようもとめたことであった。

もっとも、ギリシャ政府は反緊縮の看板を下ろすどころか、3月9日のユーログループ会合の前日、財政相のヴァルファキスをブリュッセルに派遣しエェルン・ダイセルブルーム議長に経済改革プログラムを手渡した。ツイプラス首相によれば、このプログラムは10日後の3月19日に予定されているEUミニサミットで、ギリシャの「改革への取組み」に理解を得るためのものであるとされたが、ダイセルブルーム議長のいうように、ユーログループ会合ではギリシャの「改革への取組み」は評価に値しないと判断が大勢を占めた。

だが、それにもかかわらずツイプラス首相とかれの財政相はこれを不服とし、なおもギリシャの“人的危機”を訴え理解を得るべく「友

図表3 ギリシャ債務の債権者別残高構成

単位: 億ユーロ



(注) 1 図表中、EFSFはヨーロッパ金融安定化機構を示す。

2 債務残高はいずれも2014年9月30日現在。

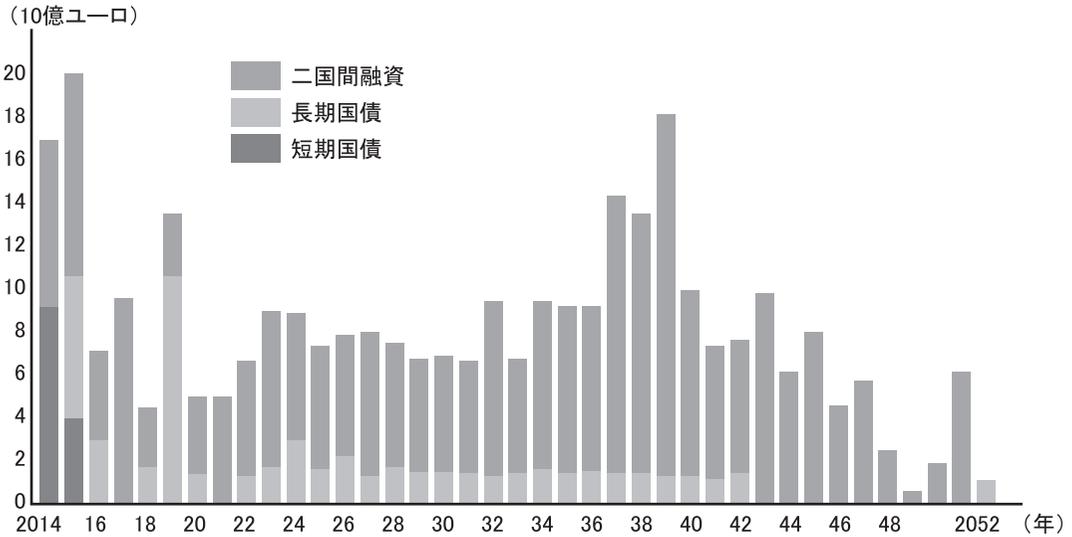
〔出所〕 *Les Echos* 資料より引用。

邦」を行脚し巻き返しに打って出た。同首相はまた3月15日には「トロイカ」あらため「関係諸機関」の一角を占める ECB のドラギ総裁に書簡を送り付け、2012年の第2次ギリシャ向け金融支援プログラムの未使用分70億ユーロ相当がギリシャの国庫に振り込まれなければ、4月中の債務返済が不能となると手回りの窮状を訴えたという。つまり、債務返済が不能となれば、預金者はパニックに陥り、国内の銀行システムは崩壊し、その行き着く先にはギリシャのユーロ圏離脱という深刻な事態が待ち構えているというのである。

話を先に進める前に、ここでギリシャ債務の現状をまとめておこう(図表3, 4, 5 参照)。

ギリシャの公的債務残高は2014年9月末現在で約3,200億ユーロ(予想)、GDPに占める比率も177%強と、2010年、2012年の両度にわたる債務救済プログラムにもかかわらず依然高水準にある。その債務の内訳であるが、二国間融資(借款)と国債に二分される。前者の大宗はトロイカあらため「関係諸機関」のうち IMF, EFSF(ヨーロッパ金融安定化機構)や EU であり、ほぼ9割を占める。一方、ギリシャ国債(短期国債をふくむ)は2012年にギリシャ居住者保有分の7割がヘアカット(減免)されたこともあって全体の25%ほどに減少した。そうとはいえ、年内に満期となる国債の規模は決して小さくなく、なかでも7月20日と8月20日に満

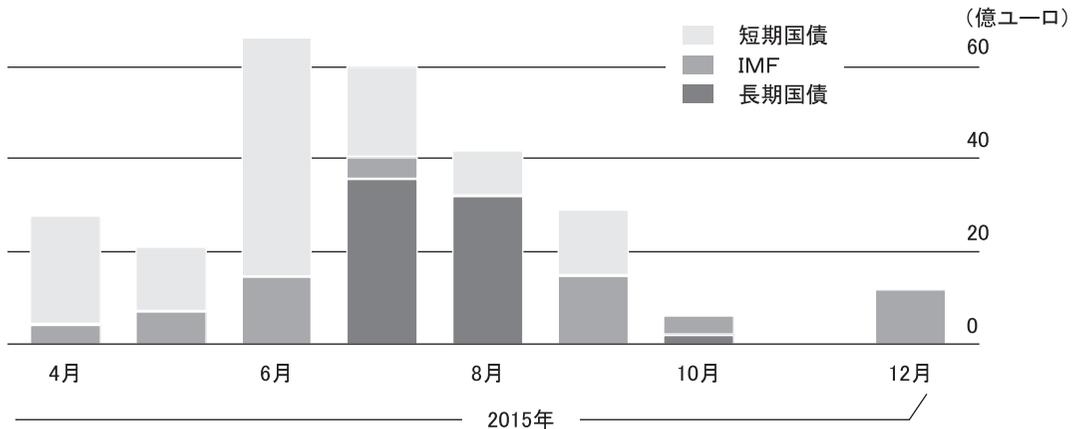
図表4 ギリシャ債務の種類別・年別別残高構成 (2014~52年)



(注) 2014年9月30日現在。

〔出所〕 *Les Echos* 資料より引用。

図表5 ギリシャ債務満期返済額 (2015年4月~12月)



〔出所〕 *Financial Times* 資料より引用。

期を迎える銘柄は今年最大級の36億ユーロ、32億ユーロという (ともにECBが保有)。

1月の総選挙を勝ち抜き政権の座に就いたアレクシス・ツィプラスがまず直面したのは膨大な国家債務の処理・解決であり、とくに2月に満期を迎える債務救済プログラムの救済資金の返済であった。すでにみたように、ツィプラス

政権は2月末に4カ月間の返済猶予を手にした。だが、3月には60億ユーロ、4月9日と17日にそれぞれ4億5,000万ユーロ、10億ユーロの返済に加えて、14日には短期国債14億ユーロが満期償還となる。翌5月にはIMFへの返済と短期国債の償還に備えて約20億ユーロ、そしてさらに救済プログラムの返済猶予が終了する

6月にはIMF融資をふくむ総額70億ユーロ近くの返済が待ち受けているなどから、通年では200億ユーロ超の返済資金を手当てしなければならぬことになる。しかも、これらに公務員給与や年金受給者への年金支払いなどで数十億ユーロが加わることから、国庫が底をつくのはもはや時間の問題であった。

さらに、シュリザ政権の窮状と来るべき“D-Day（債務不履行を宣言する日）”に備えて、ギリシャ国民は富裕層を中心に預金の取崩しがとどまるところを知らず、銀行預金残高は2014年末から2015年のはじめの2カ月余りの間に200億ユーロ超、率にして15ポイント減少して1,500億ユーロ弱、しかも取り崩された預金のすくなからぬ部分が国外に逃避したと推測される（図表6）。また、国際金融市場においても投資家がギリシャ長期国債（10年もの）を売り浴びせたため、流通利回りは同じ時期ほぼ2倍の10%台へと急上昇し、ユーロ圏の指標銘柄（ベンチマーク）であるドイツ国債とのスプレッドはじつに1,000ベーシスポイント近くとほぼ2倍に拡大した（図表7）。

事ここに至って、さすがの元スター・エコノミストのヴァルファキス財政相も弱気を隠せず、3月17日のユーログループ会合のインターバルの間、アテネの首相府に電話を入れツイプラス首相の判断を仰いだといわれる。これに対して、首相は「妥協はあり得ない」と返答したという。結局、この日の債務交渉は物別れに終わった。フランス有力紙『ル・モンド（*Le Monde*）』によると、ギリシャの首相は1週間後の3月23日、ベルリンの首相府にアンゲラ・メルケル首相を単身訪問し、また翌日にはフランクフルトに飛び市内のホテル・マリオットで友党のSPD（ドイツ社民党）党首ジークマル・

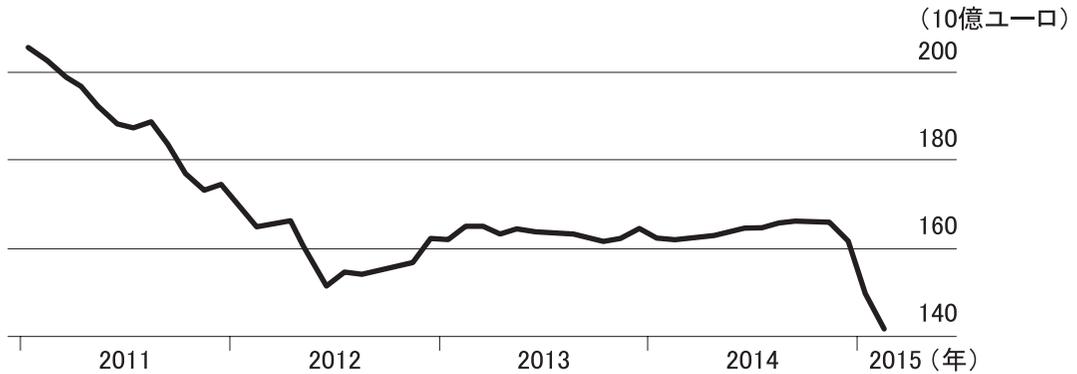
ガブリエルや、赤黒連立政権の外相フランク＝ヴァルター・シュタインマイヤーと会談して理解をもとめたといわれる。だが、メルケル首相はいうに及ばず、友党の同志たちからも色よい返事（シュリザ支持）を手にすることはできなかった。

こうして3月27日、ヴァルファキス財政相は「関係諸機関」に配慮した経済改革リストを携えてふたたびブリュッセルに飛びユーログループ会合に臨んだ。ギリシャのパートナーは大筋としてこれを受け容れ、アテネの政府は2月につづいて時間的猶予をあたえられた。しかし、このたびはツイプラス首相も前月のようにこれを「勝利」と売り込むことはなかった。それどころか、先のユーログループ前後からヴァルファキス財政相の交渉能力に疑念を抱く党内の強硬派や極左グループから“財政相更迭”を要求する声が強まり、しかも首相自らもこれに同調しているとのメディア情報が飛び交っていた。このため、政府報道官はツイプラス首相にヴァルファキス財政相の更迭の意思はなく、引きつづき財政相を債務交渉の任に当たらしめる旨の発言をしなければならなかった。

Ⅲ. 第3段階（3月28日～4月28日）——ゲームオーバー

3月末に急場をしのいだツイプラス政権ではあるが、かれがEU諸国や「関係諸機関」の要求する財政規律の確立と経済改革の実施を柱とするプログラムを4月24日のユーログループ会合までに策定すると期待する向きはほとんどなかった。むしろ2010年と12年の債務救済プログラムに代わる第3のプログラムを要求して最後の最後までねばるであろうことは予想の範囲内

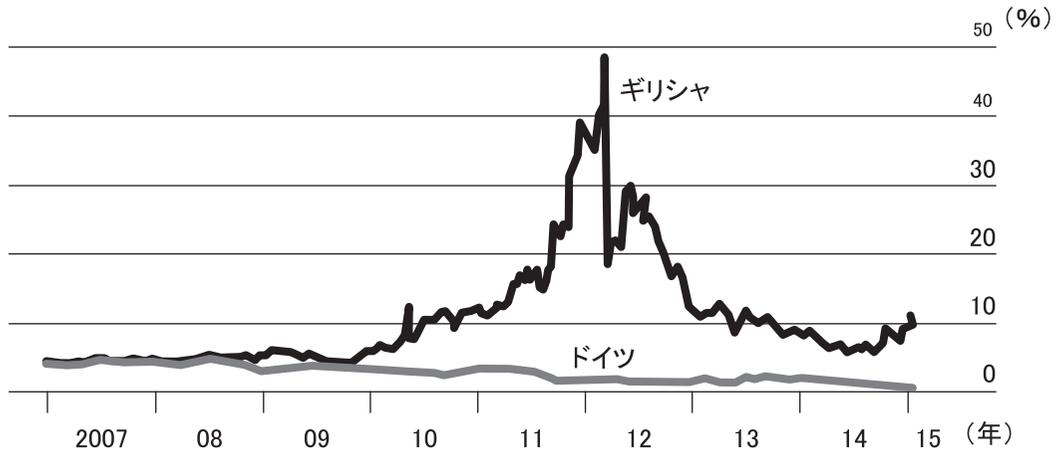
図表6 民間セクターの銀行預金残高推移



(注) 2015年は2月末現在。

〔出所〕 *Financial Times* 資料より引用。

図表7 ギリシャ長期国債（10年もの、指標銘柄）の利回り推移



〔出所〕 *Financial Times* 資料より引用。

であった。しかも、与党議員ばかりか、同様に反EU、反緊縮を主張する右翼政党やファシスト党の“黄金の夜明け (Laikós Síndesmos)”までもが事に乗じてツイプラス内閣に翻意を迫るであろうことが予想されたから、4月末までに経済改革プログラムを策定し提出するとした2月の合意が反故にされる可能性はこれを排除できなかった。

それゆえ、ユーログループをはじめとする関係者はそのような事態に立ち至った場合の準備

を怠ることはなかった。ありていにいえば、ギリシャのパートナーや「関係諸機関」などの債権団は、2月の合意が「空約束」になり、債務不履行を想定した「プランB」を最悪の場合排除できないとの見方をしだいに強めていった。ギリシャのパートナーにしてみれば、シュリザの党首が「偶発的なユーロ圏離脱 (Graccident)」の道を選択するか、さもなければ財政規律と経済改革を受け入れ難局を切り抜ける政治家としてユーロ圏の歴史にその名を刻

むか——あとは問題の問題ででしかなかった。それはまた、仮にギリシャが万一の偶発的なユーロ圏離脱を選択したとしても、ユーロ圏主要国はその準備をすでに開始していると公言したに等しい。

実際、ギリシャにとっての難題は、4月中に返済に要する資金を早急に確保することであった。すでにみたように、4月9日と17日にそれぞれ4億5,000万ユーロ、10億ユーロの返済に加えて、14日には短期国債14億ユーロが満期償還となる。仮にアテネ政府がこれをクリアできたとしても——ほとんど望み薄であるが——、5月にはトロイカあらため「関係諸機関」の一角占めるIMF融資の返済と短期国債の償還に備えて約20億ユーロを手当てしなければならず、そしてさらに救済プログラムの返済猶予が終了する6月にはIMF融資をふくむ総額70億ユーロ近くの返済が待ち受けている。

もちろん、現下のギリシャ政府の台所事情を考慮するならば、債務返済など夢のまた夢でしかない。アテネの首相府が主要国公営企業や地方政府（州または地方圏・県・市町村）の手持ちの資金の中央銀行への預託を義務づけることを決定したというスキャンダラスな記事が、ギリシャ国内はもとより、英経済紙『フィナンシャル・タイムズ』をはじめ国外の主要メディアの紙面を飾ったのもゆえなしとしない。もちろん、まったくのデマゴギーであったが、国庫が底をつき、手元不如意のツィプラス政権が反緊縮、反トロイカの看板を下ろすことをなおも潔しとしなかったことへの圧力であったとの評がもっぱらである。

急進左派政権は万策尽きはて、「決断」には一刻の猶予もなかった。そうしたなかで、ドイツの週刊新聞『ディ・ツァイト (Die Zeit)』

の報道によると、パノス・スクレティス労働相は4月上旬のツィプラス首相のモスクワ訪問がギリシャとロシアの友好関係を「新たな段階に発展させる可能性を模索するもの」とのべたとされるが、その意味するところは、EUが首を縦に振らないならば、ウラジミール・プーチン大統領におねだりするということである。ロシアによるウクライナ侵攻、クリミア半島併合を機にEUが発動した対ロ経済制裁に対してギリシャが反対しているから、モスクワのアテネへの覚えもめでたかろうという寸法である。しかも、ツィプラス首相がいち早くプーチン大統領主催の「大祖国防衛戦争（第2次世界大戦）勝利70周年祝賀式典」に出席することを表明したことは加点到に値しよう。

だが、ギリシャ共産党 (KKE) の上を行く“プーチン詣で”は不発に終わった。ばかりか、債務救済プログラムの延長の見返りに策定を約束した経済改革プログラムの提出を目前に控えた4月17日、ゲオルギス・アンドレアス・パバンドレウ前首相のお株を奪って、ツィプラス首相が議会解散・総選挙か国民投票によってユーロ圏残留を国民にあらためて問うといきがってみせた。これに対して、ドイツのヴォルフガング・ショイブレ財政相はあるインタビューに答えて、国民投票はこれを支持するも「[金がほしいなら]モスクワにでも、北京にでも、ニューヨークにでも行くがいい」と言い放った。

ショイブレ発言はアテネ政府への最後通牒であったろう。実際、予想に違わず、4月20日にラトビアの首都リガで開催されたユーログループ会合において、ツィプラス政権の経済改革プログラムはギリシャをのぞくユーロ圏のパートナー18カ国の容認するところとはならず、追加

救済の要求を再度退けた。ここに至ってギリシャも勝算なしと悟りユーログループや「関係諸機関」と合意する意向を示さざるを得なくなったといつてよい。ちなみに、仏経済紙『レ・ゼコー (Les Echos)』によれば、3時間に及ぶ会合後、ユーログループのイェルン・ダイセルブルーム議長はメディアにこう語ったという。「[ギリシャが仕掛けた] チキンゲームはいまや“アングリーバード (Angry Birds)”のゲームに転化したようだ」。はたしてダイセルブルームのいうとおりであれば、ギリシャは“チキン”どころか、“アングリーバード”の卵を盗む強欲なブタ——^{チキン}鶏の皮をかぶったブタ——ということになるかもしれない。つまり、駆除あるいは殲滅すべき害獣ということにはほかならない。

ちなみに、ユーログループ会合から2日後の4月22日、ECBはギリシャ系銀行向け緊急流動性支援(ELA)の上限をさらに引上げて755億ユーロとすると発表した。金融市場筋が伝えるように、SSM(単一銀行監督機構)によるギリシャ系銀行の国債保有の減額指導ともあいまって、ECBが債権団との合意に向けてギリシャ政府への圧力を強めるための掩護射撃であったとみてよい。

その甲斐もあって、ダイセルブルーム議長は4月24日にブリュッセルで開催されたユーログループの会合において、「関係諸機関」がギリシャ政府と引きつづき協議したうえで事態を判断するとの見解を披歴した。また、ユーログループの最大の関心事は2月20日の会合でのギリシャ政府との間で交わされた合意を受け容れ、かつこれに即した政策の構築にあるが、5月の定例会合の場でこれを最終的に評価することとした。ただしその進捗状況および評価にか

かる責任の大部分はアテネの首相府に帰するものとするとした。その意味するところは、今後の協議の成功は一義的にはギリシャの急進左派政権に依存し、ためにアテネの政府はユーログループの主張する財政規律の確立と経済の構造改革という枠組みのなかで債務交渉を継続する義務を負うということ、ギリシャをふくむユーログループ19カ国の代表者が承認したということにはほかならない。

ツィプラス政権は週明けの4月27日、ギリシャ債務交渉団の組織変更と新メンバーを発表した。それによると、新交渉チームはエウクリデス・ツァカトロス外務副大臣を団長とし、チームの調整策として英マンチェスター大学で教鞭を執る経済学者のジョージ・シュリアラキスなどからなる。英オックスフォード大学出身のツァカトロスはツィプラス首相の経済問題のアドバイザー、一方のシュリアラキスはプラグマチストで知られる副首相ヤニス・ラガサキスの側近のひとりといわれる。メディア筋によると、ギリシャ交渉団のメンバーの入替えにはドラガサキス副首相が、ツィプラス首相とヴァルファキス財政相の二人三脚の債務交渉の「失敗」の責任を追及し、財政相とその側近ニコス・セオクラキスを交渉団から外すよう圧力をかけ、首相がこれに応じた結果であるという。

一見すると、ツィプラス首相が副首相のドラガサキスの政治人事を呑んだかのように考えられるが、シュリザ古参党員の忌避する元PASOK(全ギリシャ社会主義運動)党首の経済顧問ヴァルファキスは財政相のポストにとどまり、ギリシャのパートナーや「関係諸機関」との交渉の経緯を引きつづき見守ることになる。巷間伝えられるように、首相と財政相との溝がこの間しだいに深まり、対立する場面もみ

られるのもたしかである。しかし、ドラガサキスのいう交渉の失敗の責任をヴァルファキスひとりに負わせることができないこともまた否定し得ない事実である。2月、3月にみせたツイプラス首相の「左翼原理主義」が、ドイツのショイブレ財政相をして態度を硬化せしめ、「緊縮至上主義」に固執させる一因となったのである。ドイツの有力メディア『デア・シュピーゲル』のいわゆる「アテネ対ベルリン」とは「ツイプラス対ショイブレ」の謂であり、とどの詰まり、「原理主義と原理主義」との闘争であった。双方が己の依って立つ原理に固執する限り解決策を見出せなかったのは、けだし当然といえば当然の成り行きであったろう。

それが証拠に、3月のユーログループ会合でパートナーの要求する財政規律の確立と経済改革の断行のほかに方途がないことを認め、ツイプラスに判断を仰いだヴァルファキスが受けた指示は「妥協はあり得ない」であった。かくいうヴァルファキスは新交渉チームが発表された4月27日、仏経済紙『レ・ゼコー』のインタビューに向かって、「われわれが合意するのにそう時間を要しまい。われわれには相手の言い分を呑むほかに選択肢がないからだ」と答えている。ノーネクタイ、仕立てのいいカラーシャツのうえにレザーコートを羽織ったおよそ閣僚らしからぬ——ロック・スター然とした出で立ちはともかく、かれが「マルコによる福音書」にいう“*Omnia possibilia credenti* (信ずる者にはあらゆることが可能である)” (EVANGELIVM SECVNDVM MARCVM IX, 23) の一節を金科玉条とするような、したがってまた、我と我を取り巻く現実の問題を区別できないような狂信者ではなかった証である。

はたしてギリシャの財政相のいうとおりであ

ろう。アテネ証券市場はこの日ひさびさに沸き返った。投資家など市場関係者にしてみれば、国内といわず、国外といわず、政財官の要人のほとんどを敵に回した財政相が債務処理の政治交渉の第一線を退き、ユーロ圏のパートナーとの関係改善が進むと期待したからでもある。その意味では、ヴァルファキスは役目をはたしたといえるかもしれない。事実、新交渉団が翌28日ユーログループの事務レベル会合において2月20日の合意に即した協議に応じることを明らかにしたことは、債務問題のエンドゲームが終了間近を告げるサインであった。時あたかも、アレクシス・ツイプラス率いる急進左派政権が誕生して100日が経とうとする時分であった。

結びにかえて

以上、1月25日の国政選挙で勝利し、連立政権とはいえ権力のトップに上り詰めたギリシャの急進左派政権の100日を3つの段階に分けて考察してきた。2009年に時の政府による財政赤字の隠蔽工作の発覚に端を発するこの国の債務危機は、EUをはじめとする救済プログラムによっても終熄しなかったどころか、債務救済の見返りとして要求された財政規律の確立や経済構造の改革が、これまた時の政府の下手際も手伝って経済状況を悪化させ、低成長と高失業という深刻な事態——急進左派のいう「人的危機」を生み出した。

2013年の国政選挙でアントニス・サマラスのND (新民主主義党) に後れをとったシュリザが今次選挙で第一党に大躍進した主因は、サマラス、その前任者でPASOK 党首ゲオルギス・アンドレアス・パパンドレウが実施した緊縮政策の産物である250万人の生活困窮者を中心と

する「社会的弱者」の圧倒的支持であった。シュリザはいつみれば債務危機、金融危機が育てた政党である。そしてトルコ移民3世の^{プロレタリアート}“労働者階級の前衛”アレクシス・ツィプラスはギリシャ演劇お得意の破局直前の山場で悲劇を演じるアイコン (icon catastatis) であり、そのかれが反緊縮、反トロイカを掲げて舞台上自身にあてがわれた役回りを務めたのはけだし当然であった。2010年、12年のギリシャ債務救済のさい元本の削減を行ってしかるべきであったが、債権者の懐を傷めないためにそうはしなかった。しかも、厳格な条件のもとで貸し付けられた救済資金の恩恵に浴したのはギリシャ国内の銀行家たちであり、一般の国民はトロイカからの融資の返済のために塗炭の苦しみにあえいでいる。ツィプラス首相が前任者のパンドレウやサマラスと債権団との間で交わした合意——ギリシャでいう「覚書 (memorandum)」——に服す道理など微塵もないという論法である。かれらこそギリシャに^{カストロフイ}悲劇をもたらした張本人たちだからである。

ツィプラス首相によれば、トロイカ、そしてこれを陰で操るドイツの課した過酷な融資条件で貧困線以下のどん底の生活を強いられた国民がすくなくないのは、イタリア、スペイン、ポルトガルやアイルランドも同様であり、ギリシャが反緊縮、反トロイカ、反ドイツの政治闘争を開始すれば、かならずやこれら南欧の国民が支持するはずである。何よりも、ツィプラスのヨーロッパ観は、フランス、イタリア、スペインの3国とドイツとのふたつの対抗する極からなり、ギリシャがドイツに抗えば、“友邦”のフランス、イタリア、スペインの共感を得ることは請け合いであり、最終的には債務再交渉にドイツが応じる、という読みであった。

こうしてツィプラスは出自のまるで違う裕福な家庭の出であるヤニス・ヴァルファキスを政権に取り込みドイツに挑んだのであった。ここではくり返さないが、ツィプラス=ヴァルファキスの戦いは、政権発足から数えて100日になんなんとする4月末、「関係諸機関」との債務交渉を再開することを約して実質上終わった。ヴァルファキス財政相のいうように、ギリシャを国家破産から守る選択肢はほかにないという現実を受け容れなければならなかったのである。新政権の100日は、いつみれば、ギリシャのソブリン危機の処理・解決に至る“エンドゲーム”であったといえるかもしれない。

はたしてそうであるとすれば、ツィプラス首相は端から勝算のない戦いを戦ったことになり、時間と資源の浪費といえないこともない。しかも“終戦”は遅きに失したのではないかと考えられないでもない。ツィプラス政権は5月中旬のユーログループ会合で経済改革プログラムを提出し、遅くとも6月末までに返済を猶予されている救済プログラムの返済条件に合意を取り付けてはいないものの、そこに至るまでの時間は限られている。ばかりか、この間の混乱により立ち直りかけていたギリシャ経済状況の足並みに乱れが生じ、歳出の抑制、税収増などをつうじた財政収支の改善によって年内に200億ユーロ超の返済を遅滞なく返済できるどうか疑問視されている。

この3月に第8代ギリシャ共和国大統領に就任したプロコピス・パヴロプロスは4月24日のユーログループとツィプラス政権との間で合意が成立した直後、ドイツ週刊誌『デア・シュピーゲル』のインタビューに答えて、「われわれは債務の返済を約束する。永遠に借りつづけるわけではない」とのべている。しかし、債務

返済の「約束」が信頼を得るためには、すくなくとも公債費をのぞく基礎的財政収支の黒字化が必要である。ギリシャの基礎的収支がこの数年黒字を計上した実績はなきに等しく、債権者の信頼を回復するほどのレベルにたっていない。財政規律の確立のためにいっそうの努力を要請されるゆえんである。しかるに、「ギリシャにチャンス」だけでは、ヤニス・ドラガサキス副首相が3月に英紙『フィナンシャル・タイムズ』に寄稿した小文と同様に実質に乏しく説得力に欠ける。ギリシャは2010年と12年の二度にわたって立ち直りのチャンスをあたえられたが活かせなかったことは、今次ソブリン危機の火付け役コストス・カラマンリスのもとで内相を務め、ND（新民主主義党）が野に下る直前まで国会議員をつづけた、カロロス・パプリアスの後任ともあろう人が知らないはずがない。裏の裏まで知り尽くしているはずである。

アテネの政府にとっての当面の問題はそれだけではない。4月末に「関係諸機関」などと交わした合意に即して策定を予定している経済改革プログラムが、与党シュリザや ANLE（独立ギリシャ人）はもとより、野党諸会派によって承認されるかどうかは依然として不透明である。パートナーの強くもとめる年金制度や労働市場の改革、国営企業の民営化などはシュリザ内極左グループが強硬に反対するであろう。とくに、アテネ南西の都市ピレウスの港湾公社やサマラス政権下で閉鎖された ERT（ギリシャ国営放送）を中央政府が手放すことには、骨の髄までスターリン主義者のパナギオティス・ラファザニス資源エネルギー相やニコス・ヴァーツイス内相ら強硬派、ひいてはシュリザの支持基盤である労働組合が猛反撥することは目

に見えている。

しかも、付加価値税（VAT）の引上げをはじめとする税制改革は、国内の大手企業やオリガルキー、それにその代弁者である ND などの野党議員たちの執拗な抵抗を招くであろう。与野党の政治家たちがツイプラス首相を問責する事態に発展することも十分考えられる。そうなれば、債務交渉が振出にもどるだけでなく、シュリザの分裂とツイプラス内閣の崩壊、債務危機の再燃を覚悟しなければならない。そしてその先に見えるのは、“Grexit（ギリシャのユーロ圏離脱）”——偶発的であろうがなかろうが——ではなく、むしろ「ユーロ圏から出ていけ！」のシュプレヒコールとデモンストレーションであろう。

本稿の冒頭でも紹介したように、いまやギリシャのユーロ圏離脱を公言してはばからない政治家や財界人は決してすくなくない。軍事政権から民主政権への移行をとげたばかりのギリシャの EC（ヨーロッパ共同体）——EU の前身——への加入の可否が話し合われていた1970年代末、渋るブリュッセルのロイ・ジェンキンス委員会を余所に、西独首相ヘルムート・シュミットとともにギリシャの加入を急がせた時の仏大統領ヴァレリー・ジスカール＝デスタンにしてからが、いまやギリシャのユーロ圏離脱の支持者のひとりである。これに対して、ツイプラス政権の国防相パノス・カメノス（ANEL 党首）がギリシャのユーロ圏離脱に言及して、「ギリシャがもしもユーロ圏を離脱すれば、隣国イタリア、スペインに飛び火し、ヨーロッパを混乱に陥れる」と息巻いたが、所詮、ブラフにすぎない。ドイツやオランダをはじめとするギリシャのパートナーの多くは債務交渉の決裂を想定して「プラン B」、すなわちギリシャの

ユーロ圏離脱の準備をすでに開始しているといわれる。

ツイプラス首相が持みとしたフランス、イタリア、スペインはもとより、友邦のロシアも動かなかつたものの、ギリシャ歴代の「泥棒国家」政権のつけの返済は待たなしてである。首相には左翼原理主義的“反緊縮・反トロイカ”から、「財政規律の確立と最大限の経済改革」への方向転換のカードしか手元に残されていない。その意味からすれば、PASOKを見限り改革派エコノミストに転身したエレナ・パナリティスのいう「ギリシャは6月末まで〔中略〕きわめて危険な状態にある。一連の経済改革案を早急に作成しなくてはならない」はまさに正論というべきであろう。

参 考 文 献

- 中川辰洋 [2010] 「ギリシャ危機と財政再建計画の深層——連邦ルールを志向するユーロ圏——」『青山経済論集』第62巻第3号, 青山学院大学経済学会。
- 中川辰洋 [2011] 「ユーロ圏債務危機の新展開——2010年12月のEU首脳会議決定の含意——」『青山経済論集』第62巻第4号, 青山学院大学経済学会。
- 中川辰洋 [2012] 「ユーロ圏債務危機の転換点——2012年6月のEU首脳会議をふりかえって——」『証券レビュー』第52巻10号, 日本証券経済研究所。
- 中川辰洋 [2013] 「キプロス金融救済の混迷——ユーロ圏銀行同盟構想への教訓——」『青山経済論集』第65巻第1号, 青山学院大学経済学会。
- 中川辰洋 [2014] 「変容するEUの課題と展望——ヨーロッパ議会選挙後のプロセスを中心にして——」『青山経済論集』第66巻第2号, 青山学院大学経済学会。
- Baker, Tony [2015] “Unholy alliance of radical left and right emerges”, *Financial Times*, January 27.
- Barber, Tony [2015] “Bailout reform plan: Lagarde shows tough loves to Athens”, *Financial Times*, February 27.
- Barber, Tony and Kerin Hope [2015] “Greece: Decision time”, *Financial Times* April 18/19.
- Barré, Nicolas [2015], “Valéry Giscard’Estaig: <La Grèce doit sortir de l’euro>”, *Les Echos*, 19 février: un entretien aux *Echos* avec Valéry Giscard’Estaig, Ancien président de la République.
- Bauer, Anne [2015a] “Dettes : les Européens prêts à discuter d’un rééchelonnement, pas d’un effacement”, *Les Echos*, 9 février.
- Bauer, Anne [2015b] “L’Eurogroupe veut prolonger jusqu’à juin le programme d’aide à Athènes”, *Les Echos*, 17 février.
- Bauer, Anne [2015c] “Négociation avec la Grèce: le clash”, *Les Echos*, 17 février.
- Bauer, Anne [2015d] “La tension atteint son paroxysme entre l’Allemagne et la Grèce”, *Les Echos*, 20-21 février.
- Bauer, Anne [2015e] “Les Européens imposent à la Grèce de collaborer avec les experts de la troïka”, *Les Echos*, 10 mars.
- Bauer, Anne [2015f] “L’Eurogroupe demande plus de réformes à Athènes”, *Les Echos*, 24 avril.
- Bauer, Anne [2015g] “Grèce: Yánis Varoufákis semble prêt à lâcher du lest face à l’Eurogroupe”, *Les Echos*, 27 avril.
- Bauer, Anne [2015h] “La Grèce ouvre enfin les négociations avec ses partenaires européens”, *Les Echos*, 30 avril.
- Blome, Nikolaus [2015] “The quest for common ground between Greek morals and German maths”, *Financial Times*, 28/29 March.

- Blome, Nikolaus, Sven Böll, Katrin Kuntz, Dirk Kurbjuweit et al [2015] “<The Fourth Reich>: What some Europeans see when they look at Germany”, *Spiegel Online International*, March 23: www.spiegel.de
- Blome, Nikolaus, Giorgos Christides and Christian Reiermann [2015] “Grexit grumblings: German open to possible Greek Euro Zone exit”, *Spiegel Online International*, January 5: www.spiegel.de
- Blome, Nikolaus, Manfred Ertel, Julia Amalia Heyer et al. [2015] “Merkel’s unintended creation: Could Tsipras’ win upset balance of power in Europe?”, *Spiegel Online International*, January 30: www.spiegel.de: Spiegel Interview with Economics Minister Giorgos Stathakis.
- Blome, Nikolaus, Martin Hesse, Alexander Neubacher et al. [2015] “The Grexit Dilemma: What would happen if Greece leaves the Euro Zone?”, *Spiegel Online International*, February 20: www.spiegel.de
- Blome, Nikolaus, Martin Hesse, Christian Pauly, René Pfister, Christian Reiermann and Gregor Peter Schmitz [2015] “Endgame: Power struggle in Brussels and Berlin over fate of Greece”, *Spiegel Online International*, March 13: www.spiegel.de
- Blome, Nikolaus, Christian Reiermann and Alexander Smolczyk [2015] “Family feud: The tortured relationship between Schäuble and Varoufakis”, *Spiegel Online International*, February 20: www.spiegel.de
- Blome, Nikolaus and Christoph Schult [2015] “European Parliament President Schult: <Greek voters should be realistic>”, *Spiegel Online International*, February 3: www.spiegel.de
- Buhse, Malte [2015] “Griechenland: Katastrophenfall <Graccident>”, *Zeit Online*, 19. März: www.zeit.de
- Charrel, Marie [2015] “Peut-on encore sauver l’euro ?”, *Le Monde*, 21 avril.
- Chatignoux, Catherine [2015a] “Grèce: le parti anti-austérité Syriza remporte une victoire historique”, *Les Echos*, 26 janvier
- Chatignoux, Catherine [2015b] “Grèce: en s’alliant avec les souverainistes Aléxis Tsípras envoie un message négatif”, *Les Echos*, 27 janvier.
- Chatignoux, Catherine [2015c] “Grèce: à peine formé, le gouvernement stoppe la privatisation du port du Pirée”, *Les Echos*, 28 janvier.
- Chatignoux, Catherine [2015d] “Tsípras prend le risque d’un affrontement avec l’Europe”, *Les Echos*, 9 février.
- Chatignoux, Catherine [2015e] “Grèce: le gouvernement Tsípras lance ses premières lois”, *Les Echos*, 2 mars.
- Chatignoux, Catherine [2015d] “Défense, économie, diplomatie: Paris et Berlin se rapprochent”, *Les Echos*, 31 mars.
- Chatignoux, Catherine et Isabelle Couet [2015] “Sous la pression, Tsípras remanie son équipe de négociation”, *Les Echos*, 27 avril.
- Christides, Giorgos, Davide Böcking and Roland Nelles [2015] “Debt Crisis: Greek President promises repayment of all debt”, *Spiegel Online International*, April 27: www.spiegel.de: Spiegel Interview with Prokopis Pavlopoulos, the Greek President
- Dragasakis, Yannis (Ioannis) [2015] “All we ask is that Europe give Greece a chance”, *Financial Times*, March 18.
- Ducourtieux, Cécile [2015] “Le Grexit n’est pas un objectif politique”, *Le Monde*, 17 mars: un entretien au *Monde* avec Klaus Regling, le directeur général du Mécanisme européen de stabilité.
- Ducourtieux, Cécile et Frédéric Lemaître [2015]

- "L'Europe s'inquiète d'un <Grexit> par accident", *Le Monde*, 15/16 mars.
- Ducourtieux, Cécile, Adéa Guillot, Frédéric Lemaître et Alain Salles [2015] "Le rude apparentissage européen de la Grèce", *Le Monde*, 30 mars.
- Ducourtieux, Cécile et Adéa Guillot [2015] "Varoufakis écarté des négociations avec l'Europe", *Le Monde*, 29 avril.
- Ertel, Manfred [2015] "Greece's new Economics Minister: <Europe doesn't need to be afraid>", *Spiegel Online International*, February 2: www.spiegel.de
- Ertel, Manfred, Julia Heyer, Walter Mayr and Juliane von Mittelstaedt [2015] "Defiance and charm: A measured first week for Greek leader", *Spiegel Online International*, February 6: www.spiegel.de
- Ertel, Manfred, Katrin Kuntz and Angelos Kovaïos [2015] "Greeks in the crisis: <We need to explain ourselves>", *Spiegel Online International*, March 2: www.spiegel.de
- Ertel, Manfred, Katrin Kuntz and Mathieu von Rohr [2015] "We don't want to go on borrowing forever", *Spiegel Online International*, January 5: www.spiegel.de: Spiegel Interview with Greek Prime Minister Alexis Tsipras.
- Ertel, Manfred and Christoph Schult [2015] "Greek roulette: What would Syriza's victory mean for Europe?", *Spiegel Online International*, January 5: www.spiegel.de
- Filippis, Vittorio de [2015] "Georgios Katrougalos, ministre grec de la réforme administrative: <Ce qui change, c'est que nous ne subissons plus>", *Les Echos*, 16 février.
- Frankfurter Allgemeine Zeitung [2015] "FDP-Chief Lindner: <Ein zeitweiliger Grexit wird Europa Stärken>", *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 5. April: www.faz.net
- Furbury, Pierre-Alain, Thibault Madelin et Benjamin Quenelle [2015], "Le retour de force du couple franco-allemand", *Les Echos*, 13-14 février.
- Gibier, Henri [2015] "Varoufakis, pour la beauté du geste", *Les Echos*, 26 février.
- Hesse, Martin and Christian Reiermann [2015] "Athens vs. Brussels: Greece inches closer to renewal of debt crisis", *Spiegel Online International*, February 10: www.spiegel.de
- Hesse, Martin, Christian Reiermann and Christoph Schult [2015] "Euro poker: Greece and EU at loggerheads ahead of Monday morning", *Spiegel Online International*, February 16: www.spiegel.de
- Hiault, Richard [2015] "La crise grecque s'invite en arrière plan du G20 Finances", *Les Echos*, 17 avril.
- Honoré, Renaud [2015a] "La Grèce réveille les divisions de l'Europe", *Les Echos*, 2 février.
- Honoré, Renaud [2015b] "Europe: la Grèce montre patte blanche et obtient un court répit financier", *Les Echos*, 25 février.
- Hope, Kerin and Tony Barber [2015] "The Greek radicals determined to make their mark", *Financial Times*, April 22.
- Hüetlin, Thomas and Alexander Neubacher [2015] "Greek Finance Minister Varoufakis: <Austerity has done nothing to solve Greece's problems>", *Spiegel Online International*, February 16: www.spiegel.de: Spiegel Interview with Greek Finance Minister Giannis Varoufakis.
- Jones, Claire and Ferdinando Giugliano [2015] "ECB split on move to cancel Greek waiver", *Financial Times*, February 6.
- Lacour, Jean-Philippe et Isabelle Couet [2015] "La BCE choisit de germer ses guichets aux banques grecques", *Les Echos*, 5 février.

- Lacour, Jean-Philippe [2015] "Peter Praet: <En ce qui concerne la troïka, nous ne sommes pas satisfaits de la situation actuelle>", *Les Echos*, 5 février: un entretien aux *Echos* avec Peter Praet, Membre du directoire et économiste en chef de la BCE.
- Madelin, Thibault [2015] "Merkel estime que la Grèce a <un chemin très difficile> devant elle", *Les Echos*, 10 mars.
- Madelin, Thibault et Anne Bauer [2015] "Tsípras et Merkel s'opposent sur les réparations", *Les Echos*, 24 mars.
- Moore, Elaine and Kerin Hope [2015] "Size of Greek debt mountain limits scope for solutions", *Financial Times*, January 14.
- Münchau, Wolfgang [2015a] "The real Eurozone problems are hidden under the bonnet", *Financial Times*, March 30.
- Münchau, Wolfgang [2015b] "Tsipras will not find salvation in Moscow", *Financial Times*, April 7.
- Pauly, Christoph, Christian Reiermann and Christoph Chult [2014] "The Greek patient: Europe debates third bailout package for Athens", *Spiegel Online International*, Dec. 12: www.spiegel.de
- Pauly, Christoph and Christoph Schult [2015] "Shrinking Merkel down to size: Berlin faces austerity challenge in Brussels", *Spiegel Online International*, February 10: www.spiegel.de
- Pfister, René, and Gregor Petr Schmitz [2015] "A Grexit would be a catastrophe", *Spiegel Online International*, February 10: www.spiegel.de: Spiegel Interview with French EU Commissioner Pierre Moscovici.
- Quatremer, Jean [2015] "UE et Grèce: un gros poing de contract", *Libération*, 10 mars.
- Spiegel [2015] "Krise in Griechenland: Ex-Premier Papandreou fordert Euro-Referendum", *Spiegel Online Wirtschaft*, 5. April: www.spiegel.de
- Spiegel, Peter [2015a] "How Eurogroup chief sealed the deal with Greece", *Financial Times*, March 2.
- Spiegel, Peter [2015b] "Radical or realist?", *Financial Times*, January 24/25.
- Spiegel, Peter [2015c] "Final showdown approaches for EU and Greece", *Financial Times*, February 14/15.
- Spiegel, Peter [2015e] "Greek bailout summit ends in disarray", *Financial Times*, March 21/22.
- Spiegel, Peter and Kerin Hope [2015] "Eurozone anger with Athens intensifies", *Financial Times*, April 6.
- Stephens, Philip [2015] "The stand-off that may sink the euro", *Financial Times*, January 30.
- Tsipras, Alexis [2015] "Greece can balance its books without killing democracy", *Financial Times*, January 21.
- Vasagar, Jeevan and Peter Spiegel [2015] "Merkel under pressure after bailout rebel quits", *Financial Times*, April 1.

(青山学院大学経済学部教授・
当研究所客員研究員)